

詩集

「雲」その六

八木 昭二 郎

著者略歴

一九二七年 大阪市生まれ 八尾小学校卒

現在、横浜市在住

一九八九年 「雲」 詩集

一九九〇年 「雲」その二 詩集

一九九一年 「雲」その三 詩集

一九九二年 「雲」その四 詩集

以上 近代文藝社より発行

03・3942・0869

一九九四年 「雲」その五 詩集

詩歌文学刊行会より発行

詩集「雲」その六

定価一、八五〇円（本体一、七九六円）

発行日 一九九六年一月一日初版

著者 八木昭二郎

横浜市神奈川区新子安一―二五―二二

発行者 佐藤 真弓

発行所 詩歌文学刊行会

東京都文京区本郷一―三三―一〇

（〒一―一三）スカイコート後楽園一〇五

電話 〇三（三三八一四）九五九一

印刷／製本 株式会社 井上総合印刷

落丁・乱丁本はお取替致します。〇八三〇

詩集
「雲」

その六

八木
昭二郎

詩歌文学刊行会

目次

かくれんぼう	8
とんぼの目	9
川	10
花	12
母のこと	13
母が言ったこと	16
パンドラの箱	20
羅城門	24
パントマイム	28
フリージア	30
名札	32

棚	血	ある男	おちんちん	堰	最上川	栗の実	母の死	あしたの天気	坊さん	ブナの木	へんな夢をみた	「、」を打ったら
58	54	52	50	48	47	46	45	42	41	40	36	34

五 能 線	名 前	死	切り 花	木	愛	わが 町	靴	雲	思 い つ く ま ま に	い し	少女とハゲ タカ	川
		104		101	100		83	77				60
106	105		102			86				66		
									68		62	

グー チョコ パー	指 環	シジ フォ ス	「莊 重」	祭 り	風呂 屋さ んの 煙	洗 濯	娘 さん	切り 口	夢	お 金	被災 地に て	三月 にな れば
	125	123	121	119		117	115	114	113	112	110	108
					118							

蓋	石けん	歴史	兵隊さん
131			
	133	134	135

装画・安田恵美子	装丁・朱井 真留	写真・八木昭二郎
----------	----------	----------

「雲」
その六



かくれんぼう

すぐに見付かる人はさげすまれる

なかなか見付からない人はきらわれる
ほどほどに

人は一生かくれんぼうしているんだ
そして

かくれてる間

探している間は孤独なんだ

とんぼの目

一年は三百六十五日

十年は三千六百五十日

五十年は――

人の生きる日かずほどとんぼは目をもっている

いのちの短い生きものは

そんな目で一瞬を見て生きている

川

高低差で動いてきた川の水が

海へ入ると潮になる

潮になって地球をめぐっている

あれは死後の世界だ

形がなくなつて魂だけになった人の世界と同じだ

悲しみもよろこびもなく　ぐるぐるまわっている

再び川の水になるのは

何百年

何千年後だろう



花

吹雪の日に

昔の恋人が

「花はいらんかね」

「花はいらんかね」と売りにきた

母のこと

昭和のはじめ

お・わ・い・や・さん
が大きなタンクみたいなものを引張って集めにきた
各戸から桶で集めたものをそこへ入れるのだが

ある日一人がそこに落っこちた

母がその人を一生懸命洗ってあげていた

そのにおいは何年経っても消えない

風采のあがない父は

それからずっと母に体を洗ってもらっていたような気がする

(汚穢屋さん)

「母を背負ってそのあまりの軽さに三歩あゆまず」

そんなキザなことは言えませんが

お金はあげたいと思います

家を買うほどのお金はあげたいと思います

そしたら母は

お金も健康もいらないけれど

「笑い」が欲しいというにきまっている

(母を背負って……頼山陽)

庭に柿の木があった

秋には乳房のような実がなった

子供がとりにくる

小鳥がついばみにくる

そして晩秋には一つもなくなる

そんな時母は空を見上げていう

「みんなどこへ行くんだらうね？」と

冬の夕焼けにエプロンを染めながら

よく家の外に出ていた

あれは父の帰りを待っていたのでもなく

ぼくらの帰りを待っていたのでもない

母の母の帰りを待っていたような気もするし

外へ出なければならぬような

そんな空の色だったのかも知れない